

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0578 ◆◆◆

20/04/01

【 4月相場、今年は「ドル安・円高」有利との見方も 】

昨日終了した3月相場は、月間変動幅が10円以上。これは月間変動幅13.36円を記録した2016年11月以来の「大相場」ということになる。そんな数年に一度とも言えるような大変動を受けた、本日からの4月相場は一体どう動くのだろうか。今回の当レターでは恒例となっている経験則を参考にした4月の月間見通しをレポートしてみたい。

◎昨日終了3月相場は久しぶりの大変動、3ヵ月連続大相場への期待も強い

4月相場の動きを指摘する前に、3月相場についてももう少し解説をしておきたい。3月4日付の当レターで、「3月相場は一年でもっとも動く」などと指摘。2月の月間変動幅4.72円に続く2ヵ月連続大相場を期待していたのだが、そんな筆者の予想をはるかに上回る大変動を記録している。また、詳細はバックナンバーを是非とも参考にされたいが、「歴史に関するトピックス」を振り返った場合、3月は様々な歴史的な事象が観測されることが非常に多かった。それが改めて指摘するまでもなく、今年の3月相場についても「新たな歴史」を幾つも刻んだと言っても間違いのないだろう。ある意味経験則どおりだ。

さて、そんな歴史的な3月相場を受けた、4月相場はいったいどう動くのだろうか。最初に1990年以降昨年まで過去30年間の星取表を指摘すると、14勝16敗となっていた。ほぼ互角と言ってもよく、特徴と言えるほどではない。

ちなみに、一般的には「名実ともに新年度入りすることで、生保など資本筋からの外債投資が活発化。需給的にはドル高・円安有利」などと考えられている。今年についても、「GPIF(年金積立金管理運用独立行政法人)」が昨3月31日、資産運用ポートフォリオにおける外債比率を25%に引き上げる旨の発表を行っており、市場では新年度入り以降の円安進行期待が強い。しかし、過去の経験則からすると、必ずしもそうとも言えず、油断は禁物であるようだ。

方向性では目立った特徴が見いだせなかったドル/円だが、調べてみると、4月相場には別に重要なポイントが2つあることがわかった。

順を追って説明すると、うちひとつは「3月と4月の価格変動はおおむね逆方向に動くことが少なくない」こと。とくに2000年以降は例外と呼べるケースが稀であることも非常に興味深い。実際に、3月と4月のドル/円の月足を比較してみると全20例中17例までが的中、それも2003年以降2009年までは7連勝中を記録していたし、その後一度途切れたあと、2014-19年と現在6連勝中だ。

ちなみに、昨日終わった今年の3月相場はと言うと、小幅ながら月足陽線。9日に101.19円までとかなりの深押しが入ったものの、そののち急速な持ち直し。結果からするとドル高・円安レベルで終了していたことになる。いずれにしても、経験則からすれば足もと4月相場は逆方向の動き、ドル安・円高方向への動きが有利であるのかもしれない。

一方、そんな4月相場の2つ目の特徴は「一年間のなかで1月に次いで年間の最高値 or 最安値のいずれかをつける公算が大きい」ことになるだろう。

参考までに、1月については1990年以降昨年までの30年間で12回がそのパターンに合致しているが、4月は同様に30年間で7回記録。さらに、昨年は「1月に年間安値(104.10円)」をつけただけでなく、「4月は年間高値(112.40円)」を示現している。また、4月に付ける「ドルの高値 or 安値」は単純に年間の最高値もしくは最安値となるだけでなく、それが結果として「歴史に残るヒストリカルレートになる」ケースも少なくないことも、参考意見として一応指摘しておきたい。(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

